

はしがき

本書は、憲法の入門書として、大学の一般教養科目としての「憲法」あるいは「日本国憲法」といった講義で扱われる内容とレベルを念頭におき、「憲法原理とその実現」という副題が示すように、憲法原理と規範の内容を明らかにするとともに、日本の現実を踏まえて、この憲法原理をいかに実現するかという立場から執筆したものである。したがって、大学の一般教養として憲法を学ぶ人たちだけでなく、憲法のことに関心をもっておられる市民の方々や、これまでは憲法の本にあまり触れたことのない方々にも、読んでいただけるようなものになることをめざした。

具体的には、本書は16の章により構成され、おおむね憲法の全分野を網羅している。序章は、憲法の総論にかかわるもので、憲法とは何かを扱っている。第1章から第9章は基本的人権に関する章であり、第10章は、平和主義の原理にかかわる。第11章から第15章は、統治機構論とよばれることもある、憲法が定める政治のしくみにかかわる章である。分量としては、大学の90分の講義であれば、15回（2単位）分で扱える量を想定している。

第1章から第15章の各章の構成は、事例 (*Starting Point*)・講義 (*Knowledge*)・展開 (*Application*) と3部構成になっている。事例 (*Starting Point*) では、そのテーマについて、日本の現実がどうなっているかを示す一例（たとえば、事件・裁判など）が示されている。講義 (*Knowledge*) では、その事例に含まれている、あるいは関連する憲法上の論点について解説が加えられており、ここでは、他の憲法の教科書にならって、大学の講義で説明すべきことがほぼ網羅されている。最後の展開 (*Application*) では、事例 (*Starting Point*) で示された問題に対応させて、やや発展的なことが論じられている。

読者のみなさんにとっては、本書は、さまざまな使い方ができると思われるが、憲法に関する基本的知識を得るためには、事例 (*Starting Point*) で各章のテーマに関する現代的問題を知っていただいた上で、講義 (*Knowledge*) を中

心に読まれることを想定している。展開 (*Application*) では、専門的に論じ、これまでの学説・判例・実務等に対する問題提起をできるだけ試み、各執筆者の主張を出してもよいこととした。この点に本書の特色の1つがあるのであるが、入門の範囲を超えているものもあるので、関心に応じて各章末の参考文献も参照し、さらに考察を進めていただきたい。

個人主義、自由、民主主義、平和主義といった憲法の原理は、単なる理想、お題目ではない。それは、その実現を阻む現実と日々衝突しながら、そうした現実を規律し変革しようとするものである。そして、憲法の原理を実現するのは、それを実現しようとする人々の絶え間ない営為である。こうした憲法をめぐる動態を本書を通じて実感していただけたら、私たち著者としてたいへんうれしい限りである。なお、紙幅の関係で、当然ながら、本書ではとりあげることができなかった多くの問題があり、また、日々新たな憲法事象も生じている。これらの問題につき、読者のみなさんが、憲法原理を実現する観点から、それらの問題と格闘されるのに本書が少しでも役立てば幸いである。

末尾ながら、企画から刊行にいたるまで、いろいろご配慮いただき、たいへんお世話になった法律文化社編集部長の小西英央氏に、心からお礼申し上げます。

2012年春

編者